

## 厚生労働委員会質疑

お彼岸に入り、都心は穏やかな春の日差しに包まれています。街では卒業シーズンを迎え、袴姿の女性も目に留まります。先日も会合で訪れた飲食店で、卒業式を終えたばかりの高校生の団体が食事しているところに出会しました。皆、学園生活を懐かしみ、将来への夢を膨らませているのでしょうか、満面の笑みを浮かべ、話に花が咲いていました。この子たちもこの夏には選挙権を得ることとなります。少しでも政治に関心を持ち、投票所に行ってくれるのを期待したいと思います。

さて、開会中の第190回通常国会は、3月1日に衆議院本会議で平成28年度予算案が可決し、参議院に送られました。参議院では翌3月2日、3日の予算委員会にて予算案の基本的な審議が行われ、論戦がスタートしました。また、3月8日には、厚生労働委員会において塩崎厚生労働大臣の所信表明が行われました。久しぶりに厚生労働委員会に戻った私は、10日の同委員会での大臣所信表明に対する質疑において、質問に立ちました。

質疑では、まず「1億総活躍」社会の実現を目指した、「GDP六百兆円」、「希望出生率1.8」、「介護離職ゼロ」の目標のうち、希望出生率の「1.8」の考え方を確認した上で、政府に対して、人口問題という難しい政策目標の実現に向けて、きめ細かな政策設定と政策過程の検証をお願いしました。

次に、かかりつけ薬剤師・薬局についての塩崎大臣のお考えを伺いました。大臣からは「患者本位の医薬分業の実現ということで、かかりつけ薬剤師には患者の服薬状況を一元的かつ継続的に把握をする、患者に対する薬物療法の安全性、有効性を専門的観点から確保するとともに、後発医薬品への切替え、あるいは残薬の管理を通じて医療保険財政の効率化にも寄与することを期待し、今回の診療報酬改定においても、その機能を評価する仕組みとしました。今後とも、地域包括ケアシステムに参画し、患者中心のかかりつけ薬剤師を推進して、国民がメリットを十分に実感できる、医薬分業の本当にあるべき姿を明らかにしながら進めていかなければならない。」とのお答えを頂き、私から、予算案にある、患者のための薬局ビジョン実現のためのモデル事業について、一刻も早い実施をお願いしました。また、調剤報酬の一部負担金に対するポイント付与について、厚労省の適切な対応を求めました。

この他、薬価の例外的な再算定等を引き合いに、医薬品産業のイノベーション推進と国民皆保険制度の維持という課題について、産業界の意向も踏まえた検討をお願いし、イノベーションの適正な評価のためにも、医薬品流通における単品単価取引の拡大を求めました。

翌週の14日には、予算委員会の「社会保障・国民生活」に関する集中審議でも質問に立ちました。委員会の模様はNHK総合TVで生中継されましたので、ご覧頂けたかと思いますが、ここでも、かかりつけ薬剤師・薬局の役割や期待について、大臣のお考えを伺いました。

今後も機会を得て、薬剤師の果たす役割の大切さを訴えていきたいと思えます。